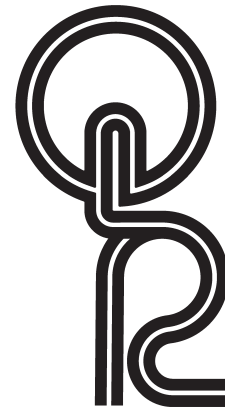
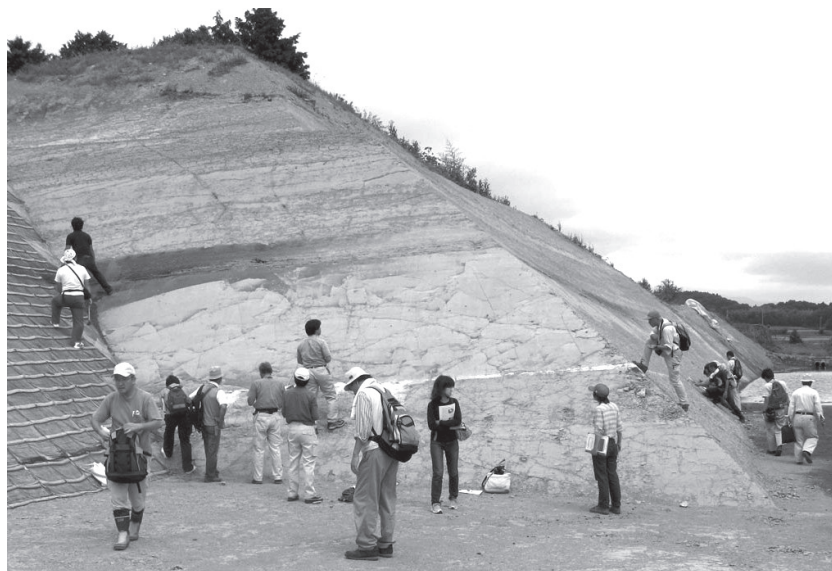


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 16 No.6, 2009



2009年大会後の巡検で訪れた滋賀県堅田丘陵の古琵琶湖層群の露頭 (Stop3)。佐川II火山灰層を挟む佐川粘土層が観察できる。(撮影 里口保文)

Vol. 16 No. 6

December 1, 2009

2009年度論文賞・奨励賞・・・・・・・・2	デジタルブック購入案内・・・・・・・・12
学会賞・学術賞受賞者講演会・・・・2	Active Tephra in Kyushu 2010・・・・14
学会賞・学術賞候補者募集・・・・3	幹事会議事録・・・・・・・・・・・・14
論文賞・奨励賞募集・・・・・・・・4	地球惑星科学連合大会日程・・・・15
日本第四紀学会シンポジウム・・・・7	会員消息・・・・・・・・・・・・16
日本学術会議シンポジウム・・・・8	研究委員会シンポジウム案内・・・・16
大会シンポジウム報告・・・・・・・・9	紙碑・・・・・・・・・・・・17
普及講演会報告・・・・・・・・9	役員補充選挙報告・・・・・・・・18
大会巡検報告・・・・・・・・10	北淡国際活断層シンポジウム・・・・19
講習会案内・・・・・・・・11	

◆ 2009 年度論文賞・奨励賞

＜受賞者の言葉＞

このたびは、日本第四紀学会奨励賞をいただき誠にありがとうございます。

私は2004年7月に中国科学院古脊椎動物與古人類研究所 (IVPP) で修士を修了し、その後2004年10月から国費外国人留学生として日本へ渡航いたしました。それから三年半、大阪市立大学大学院理学研究科地球学科人類紀自然学研究室に所属し、2008年3月に理学博士号を授与されました。現在はIVPPに戻ってポスドクとして研究を続けています。

受賞となった2つの論文は博士論文の参考論文です。博士論文の主なテーマは、中国北部における鮮新世～前期更新世のハタネズミ類の生物年代学です。従って、なるべく(1)ハタネズミ類化石の産出する、(2)年代のはっきりしている、という2つの条件を満たす化石産地を目指すという考えで、博士論文の中の前期更新世の代表サイトとして、2005年7月に中国河北省泥河湾盆地にある小長梁遺跡で発掘を行いました。小長梁遺跡の遺物を出土する層準の年代は、古地磁気学から1.36Maとされています。私はそこから約1.6トンの堆積物を採取し、目の細かい篩を用いて水洗して、沢山の小型哺乳類化石を得ました。これらの化石は10種に同定されました。そのうち *Ochotona minor*、*Yangia tingi*、*Allophaiomys deucalion*、*Borsodia chinensis*、



張 穎奇氏

Chardinomys nihowanicus は絶滅種、*Crictulus barabensis* と *Micromys minutus* は現生種です。この遺跡の動物群を他の化石産地の動物群と比較した結果、*Ochotona minor*、*Yangia tingi*、*Borsodia chinensis*、*Allophaiomys deucalion*、*Chardinomys nihowanicus* の産出は、この遺跡のものが最も新しく、これらの絶滅種は1.36Maを最後にこの地域から絶滅したと考えられます。一方、*Crictulus barabensis* といった現生種は、すでに1.36Ma頃にはこの地域に分布していたことが分かりました。またナキウサギ科やキヌゲネズミ科、トガリネズミ科、ハタネズミ科、ネズミ科の現生種で今の中国北部に分布するものの多くは、1.36Ma以降に出現したと考えられます。

本研究のフィールドワークでは、中国廈門大学の蔡保全教授とIVPPの鄭紹華教授に大変お世話になりました。論文発表の際には、愛知教育大学の河村善也教授から丁寧な指導を賜りました。心から感謝しております。

また、日本に滞在した三年半の間に、人類紀自然学研究室の吉川周作教授、熊井久雄教授、三田村宗樹准教授、北瀬(村上)晶子博士、広瀬孝太郎博士、井上 淳博士をはじめとする多くの方々にお世話になりました。私の博士論文は愛知教育大学の河村善也教授の懇切な指導で完成させることができました。大阪市立自然史博物館の樽野博幸学芸課長、京都大学の神谷英利准教授、国立科学博物館の富田幸光室長にもいろいろお世話になりました。私は中国人として、心から日本の方々に恩を感じております。私は現在中国にいますが、これからも自分が研究している分野で日本と中国の交流の橋渡しとして自分の力を尽くして頑張っていきたいと思っております。

◆ 2009 年度 日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者講演会のお知らせ

日本第四紀学会では、第四紀学の発展に貢献し顕著な業績をあげ、また学会活動に貢献した会員に授与される「学会賞」、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた会員に授与される「学術賞」を設け、大会時に受賞者を発表し、第四紀通信でご紹介しています。また、受賞者による記念講演会を2回に分けて行う予定であり、第1回目の講演会を下記のとおり実施します。参加費は無料で事前登録は必要ありません。会員以外の方も聴講できます。なお、終了後は同じ会場にて日本第四紀学会主催のシンポジウム「第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する」が開催されます。あわせて多数のご参加をお待ちしております。

2009 年度 日本第四紀学会 学会賞・学術賞受賞者講演会 (第1回)

・日 時：2010年1月31日(日) 13:00 - 14:30

・会 場：早稲田大学(早稲田キャンパス) 22号館(案内図参照)

(JR山手線高田馬場駅前より学バス「早大正門」行き「西早稲田」下車徒歩約5分、東京メトロ東西線早稲田駅下車徒歩約15分、国際会議場の斜め向かいの黄色い建物)

<http://www.waseda.jp/jp/campus/map.pdf>

・プログラム

13:00-13:05 あいさつ

13:05-13:45

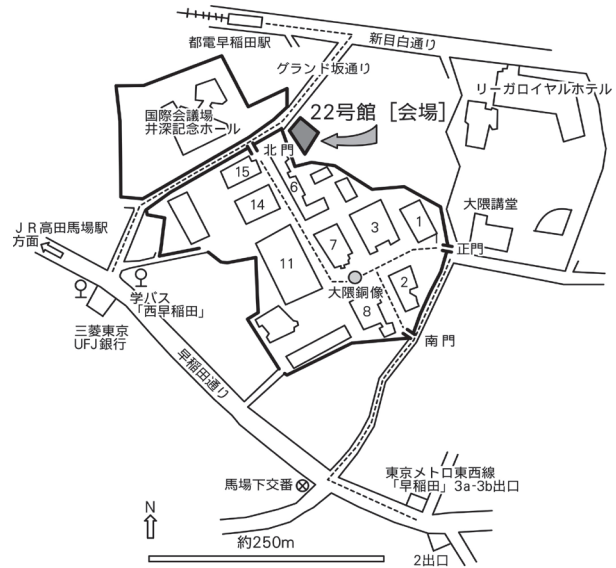
齋藤文紀会員（学術賞受賞者）
「陸と海の境界域における堆積作用と環境
変遷に関する研究」

13:45-14:25

町田 洋前会長（学会賞受賞者）
「日本列島と周辺域のテフラを基礎とした
第四紀編年：回顧と展望」

同日・同会場において日本第四紀学会主催
のシンポジウム「第四紀の開始期の環境変動
とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する」
を 14:40-18:00 に開催します。

問い合わせ：日本第四紀学会事務局
（連絡先は本号最終ページを参照下さい）



◆「日本第四紀学会賞」と「日本第四紀学会学術賞」の候補者推薦の募集について

2010年度の「日本第四紀学会賞」（以下「学会賞」）と「日本第四紀学会学術賞」（以下「学術賞」）の受賞候補者の受付を開始いたします。両賞は来年6月末日までに、学会賞受賞候補者選考委員会が、推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、来年6月頃に開催予定の評議員会において受賞者が決定され、2010年総会で表彰される予定です。

「学会賞」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

「学術賞」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著者（研究グループ等を含む）によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

つきましては、下記及び本号に掲載しました「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規」をご参照の上、「学会賞」及び「学術賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「学会賞」の場合には候補者名及び具体的な業績や活動内容を示した受賞件名と推薦理由を、「学術賞」の場合には候補者名及び受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名と推薦理由を記入する。
2. 推薦書類の提出先：
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 519 洛陽ビル 3階
日本第四紀学会 学会賞受賞候補者選考委員会 宛
3. 推薦書類の受理期限 2010年3月31日（必着）

◆「日本第四紀学会論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」候補論文推薦の募集について

2010年度の「論文賞」と「奨励賞」の推薦を下記のとおり受け付けます。これらの賞は、過去2年間（第47巻および第48巻）の「第四紀研究」に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文が対象となります。会員の皆様から自薦・他薦によって候補論文と候補者をご推薦いただき、論文賞受賞候補選考委員会において受賞候補論文・受賞候補者の選考を6月末日までに行います。受賞論文と受賞者は、来年6月頃に開催予定の評議員会において決定され、2010年総会で表彰される予定です。

「論文賞」：会員を含む論文著者全員に授与。毎年1-2件程度。対象は、掲載された全ての論文（短報を含む）。

「奨励賞」：会員である筆頭著者に授与。年齢は選考年の4月1日で35歳以下。毎年1-2件程度。

つきましては、下記及び本号に掲載しました「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会論文賞と奨励賞選考に関する内規」をご参照の上、「論文賞」の候補論文と「奨励賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 選考対象：「第四紀研究」第47巻（2008年）および第48巻（2009年）に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文。「論文賞」の場合には、著者に会員が含まれることが必要。「奨励賞」の場合は、筆頭著者が会員であること。
2. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「論文賞」の場合には全著者名と候補論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由を、「奨励賞」の場合は候補者名と推薦論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由を記入する。
3. 推薦書類の提出先：
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519 洛陽ビル3階
日本第四紀学会 論文賞受賞候補選考委員会 宛
4. 推薦書類の受理期限 2010年3月31日（必着）

◆日本第四紀学会 学会賞規定

（1994年8月26日、評議員会・8月27日、総会にて決定）
（1997年8月6日、総会にて一部改正）
（2006年8月4日、評議員会にて一部改正）
（2007年2月3日、評議員会にて一部改正）
（2008年8月22日、評議員会にて一部改正）

[目的]

第1条 本規定は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等の表彰に係わる事項を定める。

[章の名称]

第2条 本学会に、日本第四紀学会賞、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会功労賞、日本第四紀学会論文賞及び日本第四紀学会奨励賞（以下「学会賞」、「学術賞」、「功労賞」、「論文賞」及び「奨励賞」と略称する）を設ける。

[受賞の対象]

第3条 学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、及び学会活動に貢献した正会員に授与し、学会における最高の賞とする。学術賞は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。功労賞は、第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体、組織に授与する。論文賞及び奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。

[受賞者の選考]

(学会賞と学術賞)

第4条 学会賞及び学術賞候補者を選考するため、学会賞受賞者選考委員会（以下「学会賞

選考委員会」と略称する)をおく。

第5条 学会賞選考委員会は、評議員の投票により選出された評議員経験が2期以上の5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し、学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長をおく。学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。

第6条 本学会会員は、学会賞選考委員会に対して学会賞及び学術賞受賞候補者を推薦することができる。

第7条 学会賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞候補者を会長に答申する。学会賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。
〔功労賞〕

第8条 功労賞の選考は、幹事会にて行い、評議員会に候補者を推薦する。

〔論文賞と奨励賞〕

第9条 論文賞及び奨励賞受賞候補者を選考するため、論文賞受賞者選考委員会(以下「論文賞選考委員会」と略称する)をおく。

第10条 論文賞選考委員会は、評議員の投票により選出された5名の論文賞選考委員で構成し、論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし、連続して論文賞選考委員に就任することはできない。

第11条 本学会会員は、論文賞選考委員会に対して論文賞及び奨励賞受賞候補者を推薦することができる。

第12条 論文賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞候補者を会長に答申する。論文賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

〔受賞者の決定〕

第13条 評議員会は、学会賞選考委員会、幹事会及び論文賞選考委員会から推薦された受賞候補者をもとに、受賞者を決定する。

〔選考結果の報告〕

第14条 学会賞選考委員長、幹事長及び論文賞選考委員長は、評議員会の結果を踏まえて受賞者の選考経過と結果を総会に報告する。

〔授賞式〕

第15条 授賞式は総会で行い、学会賞、学術賞、功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を、奨励賞受賞者へは賞状及び副賞〈賞金〉を授与する。

〔その他〕

第16条 本規定に定めるもののほか、学会賞に係わる必要事項は内規として評議員会が別に定める。

〔規定の変更〕

第17条 本規定の変更には評議員会の承認を必要とする。

〔規定の施行〕

第18条 本規定は2008年9月1日から施行する。

◆日本第四紀学会 学会賞と学術賞選考に関する内規

(2007年2月3日、評議員会にて決定)
(2008年8月22日、評議員会にて一部改正)

1. 学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与する。
2. 学術賞は、第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。優れた編書・著書・論文などの一連の業績を対象とする。
3. 学会賞と学術賞の授与は、原則として毎年とし、それぞれ若干名とする。
4. 学術賞の対象成果が、複数の著者〈研究グループ等を含む〉によりなされたものである場合には、筆頭著者または代表者に学術賞を授与する。
5. 学会賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。選挙の際には、分野を考慮した選挙を行うため、各分野からの候補者、過去3年間の学会賞選考委員会の名

- 簿を明示する。なお、学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。
6. 学会賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
 7. 学会賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。
 8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会学会賞選考委員会宛てに提出する。
 9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名（自薦を含む）、受賞候補者名、受賞件名及び推薦理由。
 10. 会長は第四紀通信に学会賞と学術賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
 11. 学会賞選考委員会は、授与年の3月末日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。
 12. 学会賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を報告する。
 13. 学会賞と学術賞の選考において、受賞候補者が、当該年の論文賞の受賞候補者となっても、双方の賞の妨げとしない。
 14. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
 15. 本内規は、2008年9月1日から施行する。

◆日本第四紀学会 論文賞と奨励賞選考に関する内規

(1994年8月26日、評議員会・8月27日、総会にて決定)
(1995年1月28日、評議員会にて一部改正)
(1997年8月6日、総会にて一部改正)
(1999年1月30日、評議員会にて一部改正)
(2006年8月4日、評議員会にて一部改正)
(2007年2月3日、評議員会にて一部改正)

1. 選考の対象は、授与年の前々年及び前年の2年間（2巻分）の第四紀研究に発表された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文とする。奨励賞については、選考が行われる当該年の4月1日現在で、会員である35歳以下の筆頭著者の論文を対象とする。すでに奨励賞を受賞したことのある筆頭著者の論文は、奨励賞の対象とならない。
2. 論文賞と奨励賞の授与は原則として毎年とし、受賞論文数は論文賞が1-2編程度、奨励賞が2編程度とする。
3. 論文賞受賞論文が複数の著者（研究グループ等を含む）により執筆されたものである場合には、執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。同一論文が、論文賞と奨励賞の候補となった場合には、論文賞を優先する。ただし、奨励賞受賞候補者であることを選考結果報告に記載し、評議員会で論文賞が授与された際は、奨励賞の副賞も授与する。また評議員会で論文賞が授与されなかった場合は、奨励賞候補者として評議員会で審議する。
4. 論文賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員の中から、評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。
5. 論文賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
6. 論文賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。
7. 論文賞と奨励賞の選考に当たっては、論文の独創性、将来の発展性、総合性や重要な発見などを選考の基準とする。
8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。
9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名（自薦を含む）、受賞候補者名、受賞候補論文名（巻号頁を含む）及び推薦理由。
10. 会長は第四紀通信に論文賞と奨励賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
11. 論文賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を発表する。
12. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
13. 本内規は、2007年8月1日から施行する。

◆日本第四紀学会シンポジウム「第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する」のお知らせ

下記の内容で、日本第四紀学会主催のシンポジウムを行います。参加費は無料で、事前登録は必要ありません（ただし、講演要旨集は有料となる可能性があります）。各講演のタイトルや時間配分などは変更になる場合があり、最新情報は日本第四紀学会ホームページに掲載しますのでご確認ください。また、当日 13 時から同じ会場で前会長・町田 洋会員の 2009 年度学会賞、斎藤文紀会員の同学術賞の受賞記念講演会が開催されます。シンポジウムと記念講演会を同日に行いますので、ぜひともご参加下さい。

なお、日本学術会議では、2010 年 1 月 22 日（金）にシンポジウム「人類の時代・第四紀は残った」が行われます。こちらではより一般的、グローバルなテーマが取り扱われますので、日本第四紀学会のシンポジウムとあわせてご参加下さい。

日時：2010 年 1 月 31 日（日） 14:40 - 18:00

場所：早稲田大学 22 号館 202 教室 新宿区西早稲田 1-7-14（本号 3 ページ参照）

<http://www.waseda.jp/jp/campus/waseda.html>

背景：2009 年 6 月に「第四紀」の定義が変更され、従来鮮新世に区分されていた Gela 期／階（Gelasian）が第四紀に含まれることになった。鮮新世－更新世境界も Gelasian 基底まで引き下げられ、新しい第四紀の始まりはガウス / 松山クロン境界の直上に位置し、その年代は 258.8 万年前となる。第四紀を特徴づける大規模な氷床の発達がこのときを境に始まったわけではないが、280～270 万年前に始まる世界的な寒冷化が恒常的となった時期と重なる。

趣旨：日本の第四紀研究、とくに生物群集の変遷や陸域・海域の環境変動に関する研究は、従来の「第四紀」の時代に限られていたわけではない。しかし、第四紀開始期に焦点をあて、世界的な環境変動との対応で日本における環境変動とテクトニクスに関する研究を再認識することは、研究分野や対象とする時代にかかわらず第四紀研究に携わる本会員にとって有意義である。よって、次の観点から各分野に関する発表をお願いした。

1) 第四紀始まりの世界的な気候寒冷化の実態とその理解（大場氏）

2) 日本とその周辺地域を含む第四紀開始期およびそれ以降の環境変動に関する研究成果と世界的な気候寒冷化や気候変動との関わり（佐藤氏、百原氏、松浦氏）

3) 鮮新－更新世の長期テクトニクスとテフラ層による時間分解能（水野氏、里口氏）

これらの発表から、特に第四紀開始期の日本の環境変動に関する新たな視点、テクトニクスと環境変動との関わりなど、今後の第四紀に関わる研究の視座を議論したい。

プログラム（一部のタイトルは仮題）

14:40-15:00 趣旨説明、特に第四紀下限の変更について（奥村晃史）

15:00-15:25 第四紀始まりの世界的な気候寒冷化とは何か：酸素同位体比変動から（大場忠道）

15:25-15:55 パナマ地峡の成立と世界的な気候寒冷化の影響：秋田と沖縄を例として（佐藤時幸）

15:55-16:15 人類最初の出アフリカ（Out of Africa）と東方アジアへの拡散問題（松浦秀治）

16:15-16:25 休憩

16:25-16:45 植物化石群の変遷からみた第四紀の重要層準：気候変動との関連で（百原新）

16:45-17:05 哺乳動物化石群の変遷からみた陸橋の形成時期（依頼中）

17:05-17:25 鮮新－前期更新世の広域テフラ層による時間指標層としての確度と分解能（里口保文）

17:25-17:45 西南日本における鮮新－更新世内陸盆地発達史の再検討（水野清秀）

17:45-18:00 総合討論

問合せ先：日本第四紀学会企画担当幹事 植木岳雪（産業技術総合研究所）

〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 7

Tel 029-861-9126、Fax 029-861-3653、e-mail:gakusetsu-ueki(at)aist.go.jp

◆第四紀の新しい定義と地位の日本国内での普及－日本学術会議公開シンポジウムに向けて－

日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会 奥村晃史

2009年6月30日、国際地質科学連合（IUGS）執行委員会は第四紀を正式の地質時代として認め、その始まりを258万8千年前とする新しい定義を批准しました。この経緯と定義については、第四紀通信16巻5号（2009年10月）でも報告をしていますが、第四紀の新しい定義については、地質学をはじめとする地球科学諸分野、応用地質、地盤工学、自然災害などのさまざまな研究・応用分野に加え、地学教育、科学ジャーナリズムなど多方面からの疑問や関心が寄せられています。日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会とIUGS分科会では、こうした疑問や関心に答えるために、日本第四紀学会、日本地質学会と共同で、日本における第四紀の新しい定義の確立と普及を進めるための準備を進めています。今年度中に、新しい定義とその適用についての報告を公刊することが緊急の課題ですが、その検討を進めるうえで以下のような問題点が浮かび上がってきました。

□科学的な問題

- ・新しい第四紀の始まりの定義とその地学的意味
- ・地質層序、人類・古生物、環境変動からみた新しい第四紀の始まり
- ・新しい第四紀と第四紀研究の特質と重要性
- ・更新世の年代区分および日本語での名称
- ・新第三紀・古第三紀の地質年代区分としての取り扱い
- ・従来の第四紀テクトニクス、第四紀火山活動との整合性

□応用面での課題

- ・地質図の基準の変更と改訂
- ・第四紀地盤、第四紀立地の定義とその変更のもつ意味
- ・地震災害、火山災害、土砂災害に関わる第四系
- ・高等学校理科新教育課程（平成24年度以降実施）への対応

日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会、IUGS 分科会と関連学会では、これらの問題について最新の知見をとりまとめて、さまざまな立場からの議論と検討を行い、日本での新しい定義を確立するための公開シンポジウムを以下の要領で計画し、日本学術会議に提案をしています。

名 称：日本学術会議公開シンポジウム「人類の時代・第四紀は残った」

日 時：2010年1月22日（金）10時00分－17時00分

場 所：日本学術会議 講堂（〒106-8555 東京都港区六本木 7-22-34）

発表者：日本地質学会と日本第四紀学会、応用地質・工学、地学教育、地質災害の専門家

詳細は11月下旬に開催が承認され次第、会員あて電子メール、ウェブサイト等でお知らせします。1月31日（日）午後開催される、日本第四紀学会シンポジウム『第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する』（本号7ページ参照）とあわせて、研究・応用面での全貌を把握していただけるよう企画を進めています。幅広い分野の多数の方々の参加を期待します。

◆ 2009年大会シンポジウム報告

2009年大会シンポジウムは、「古環境変動へ貢献する湖沼堆積物研究の役割」というテーマで、大会最終日の8月30日(日)に行われた。参加者は約100名であった。琵琶湖湖岸に立地する琵琶湖博物館が会場という事から、湖沼堆積物をあつかった研究がテーマになるのは必然といえよう。

はじめに趣旨説明を世話人の里口が行った後、休憩を1回挟む5つの発表と、3つのコメントがあった。最後にコメントを行った高原光氏は、シンポジウム全体をまとめるようなコメントであった。講演の後には引き続き、京都大学の竹村恵二、公文富士夫の両氏の進行により総合討論が行われた。残念ながら、講演時間に限りがあるため、総合討論は予定より短い時間で行われた。しかしながら、湖沼堆積物をグローバルな古環境変動や変動システムを理解するものだけではなく、テクトニクスやその周期性などの解明の役割、日本発信の高精度研究について、湖沼堆積物コアのアーカイヴの問題など、様々な方面から議論がなされた。コアのアーカイヴについては、博物館の役割や、今後は学会においても議論

里口保文(琵琶湖博物館)

が必要ではないかとの意見も出された。

なお、このシンポジウムの内容については、講演者を中心に特集号を企画しており、現在執筆中である。蛇足ながら、このシンポジウムを行っている最中に、会場である琵琶湖博物館は来館者数700万人目を迎えた。記念すべき日にシンポジウムを行えた事を光栄に思う。ただし、残念ながらその方は学会員ではなかったようである。



シンポジウム会場の様子

◆ 日本第四紀学会 2009年大会普及講演会に参加して

佐藤ふみ(関西大学大学院文学研究科・大学院生)

2日間の一般研究発表会から連続してシンポジウム、そして普及講演会に参加させていただいた。普及講演会では「琵琶湖堆積物がつむぐ過去から未来へのメッセージ」と題し、京都大学理学研究科の竹村恵二先生と京都府立大学大学院生命環境科学研究科の高原光先生による講演が行われた。

「過去100万年間の琵琶湖堆積物に残された汎地球規模変動の記録」というタイトルで講演された竹村先生には、琵琶湖の歴史や堆積物の年代の決め方、古環境を復元する方法などについて分かりやすく説明いただいた。琵琶湖堆積物から地球規模のモンスーン変動を抽出する最新の試みについても紹介され、これまでのミランコビッチ仮説の矛盾を説明できる可能性があることが分かった。

高原先生には「琵琶湖と周辺湿地堆積物から読み解く植生と人間活動の移り変わり」というタイトルで、古生態学的研究の多角的分析から明らかになった琵琶湖周辺の植生変遷について講演いただいた。植生について知識の乏しい私にとっては、基本的な事柄から植生について知ることができ大変勉強になっ

た。特に、深泥池と琵琶湖の堆積物から得られた植生の違いや人間活動による植生変化の話は興味深かった。

両先生による講演後には質疑の時間が設けられ、一般参加者からは琵琶湖湖面の変動や近所の湖底遺跡などについていくつか質問が寄せられた。やはり、身近な事柄と第四紀研究の話が繋がると興味も一段と増すのだと思う。個人的には、10000～8000年前にかけて琵琶湖集水域で広く火事が発生したという微粒炭の研究に興味を持ち質問したが、まだ十分に説明できないこともあるのだと感じた。普及講演会は一般市民の方々のための講演会であることは言わずもがな、分野が多岐にわたる第四紀学会では自分の専門外の話聞き勉強できる良い機会でもあった。

今回の普及講演会で、琵琶湖周辺地域の古環境は、琵琶湖の湖底や湿原に堆積した堆積物の多角的な分析によって明らかになるということが改めてよく分かった。さらには、そうした地域的な変化が世界的な気候変動と対応していることから、ある程度の未来予測も可能であることを知り、琵琶湖堆積物の果た

す役割は予想以上に大きいものなのだと感じた。世界的に見ても長期間にわたる記録を保持している琵琶湖は注目されているが、その堆積物の研究には今後も更なる期待がかかっているのである。

しかし、日頃目にするのがなければ、堆積物とはなかなかイメージしにくいものでもある。一般市民に第四紀の研究を身近なものとして普及させていくという点では、もう少しローカル且つ親しみやすい話題を取り入れてもいいかもしれないと思った。まさにその近くで生活している近隣住民の方々は、貴重な堆積物に比較的容易にアクセスできるのであり、そうした学びの機会をどこかで提供できれば尚更良いのではないかと感じた。

私は、地元の研究会で琵琶湖西岸地域の古琵琶湖層群を調査して歩く機会が多い。今回のような最新の成果を交えた古環境復元についての話は興味深く、いつもの粘り気のある

粘土やサクサクした火山灰の感触を掌に感じながら聴かせていただいた。これからは、気候の変動や植生の変遷などの視点も持って堆積物に接していきたいと思える刺激的な講演会であった。



高原 光氏の講演

◆日本第四紀学会 2009年巡検参加報告

石原武志（東京大学大学院新領域創成科学研究科・大学院生）

2009年の日本第四紀学会巡検は、「琵琶湖西岸地域の地形・地質、そしてその影響」というテーマのもと、山川千代美、里口保文、高橋啓一、宮本真二（琵琶湖博物館）、小松原琢（産総研）の5氏の案内で行われた。巡検当日（8月31日）は、小雨混じりの曇天であった。

JR草津駅西口を出発後、琵琶湖大橋から琵琶湖を横断して西岸地域へ向かった。初めに、琵琶湖西岸断層帯の一つである堅田断層のジオスライサー調査地を見学した。調査により、堅田断層の最新活動時期は11世紀～13世紀の間であることが明らかにされている。これは1185年の歴史地震とも活動時期が調和的である。今後は歴史学・考古学分野の研究成果との関連付けを行い、当時の環境や災害の与えた影響を検討する必要があるとの解説をいただいた。

その後向かった堅田丘陵では、露頭を2箇所観察した。1つ目は古琵琶湖層群堅田層最上部層（約300～500ka）の露頭で、泥・砂・礫の互層が認められた。2つ目の露頭では、火山灰層（佐川Ⅱ火山灰層）や砂層を挟む厚い粘土層（1つ目の露頭の地層よりも下位の堅田層）が認められた。いずれの露頭も、参加者一同は露頭にへばりつき、観察・サンプルリングに熱中していた。

堅田丘陵を北東へ進み、1662年（寛文二年）に花折断層北部の活動で発生した地震による崩壊地形（町居崩れ）を訪れた。町居崩

れは、非火山性山地としては日本屈指の大崩壊で、当時多くの犠牲者を出した大災害である。砂利採取場で崩壊地および崩積土の堆積した露頭を遠望したが、圧巻であった。現地では、露頭の崩積土の範囲の解釈などの議論が活発に行われた。

崩壊地を出発後、花折断層に沿った安曇川の直線的な谷を北上し、安曇川へ注ぐ小河川の谷に分布する厚い火山灰層（白土谷火山灰層）の露頭を観察した。この露頭で見られる古琵琶湖層群は高島層と呼ばれ、これまでは堅田層より新しい古琵琶湖層群最上部層に位置づけられていた。しかし、最近になり白土谷火山灰層の再検討が行われた結果、堅田層とほぼ同層準であると考えられるようになった。



参加者の集合写真。町居崩れ崩積土の砂利採取場にて。

た。高島層の再解釈に伴い、今後は琵琶湖の形成史や周辺の主要断層系の活動史についても、新たな知見が得られることが期待される。

最後に、安曇川河床に露出する堅田層相当層（約 1Ma）の地層を見学した。安曇川河床には、堅田層相当層の地層が露出している。その内、泥層中からは、2004 年にゾウ・シカの足跡化石が約 120 個も発見された。現在では保存状態が悪くなっているものの、比較的明瞭な足跡化石が複数認められた。ゾウの足跡化石は前後の足跡が重なったものであり、実際のゾウの足のサイズは足跡よりも小さくなるそうである。皆解説を興味深く聞き入っている様子であった。地層中からは足跡化石の他に植物化石や昆虫化石も産出し、当時の古植生などが推定されている。

解散時に、予定地であった JR 堅田駅で電車のトラブルが発生する出来事があったものの、バスが JR 山科駅まで迂回し無事解散することができた。

今回の巡検地は、断層の活動年代や地層の年代が再評価されつつある、“ホットな”話題

の豊富な地域であった。また、現地で諸先生方の盛んな議論に触れ、学生の方々との交流の機会に恵まれたことは、私個人にとって大変有意義な時間を過ごせたと思う。

最後になりましたが、ご案内くださった先生方と、関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。



巡検の様子。断層とトレンチ位置についての説明をする小松原 琢氏。

◆日本第四紀学会講習会「地形と地層を見る目を実験で磨こう」のお知らせ（第 1 報）

日本第四紀学会では、運搬・堆積実験の講座を企画しました。みなさま、ふるってご参加下さい。事前登録された方には、後日詳細をお知らせいたします。

- ・日 時：2010 年 3 月 8 日（月）13 時－17 時
- ・会 場：東京学芸大学 環境教育実践施設 多目的室
- ・講 師：池田 宏氏（元 筑波大学陸域環境研究センター）
- ・内 容：小型実験装置による混合砂礫の運搬・堆積実験によって、山・川・海岸における地形と地層の成り立ち、たとえば、富士山、谷川、河岸段丘、扇状地、海岸砂丘、石浜と砂浜などを見る目を磨きます。
- ・参加費：500 円（保険料および資料代を含む。当日集めます）
- ・事前登録：必要（30 名定員。先着順受付）。2010 年 1 月 15 日から事前登録を開始いたします。日本第四紀学会会員を対象としますが、申し込みが少ない場合は非会員の参加も受け付けます。
- ・申込み先：下記担当者に電子メールまたはファクシミリで、参加希望の旨と以下の情報を記して申し込んで下さい。1) 氏名、2) 住所、3) 電話番号（当日に連絡可能な携帯電話等）、4) 電子メール・アドレス。締め切りは 2010 年 2 月 15 日（月）必着。メールでの申し込みの場合は件名に必ず「第四紀学会講習会参加」と書いてください。ファクシミリでの申し込みは、植木宛と明記してください。
- ・問合せ先：〒305-8567 つくば市東 1-1-1 中央第 7 産業技術総合研究所・地質情報研究部門 植木岳雪（企画担当幹事）
TEL：029-861-9126、FAX：029-861-3653
メール：gakusetsu-ueki(at)aist.go.jp

◆日本第四紀学会 50周年記念電子出版「デジタルブック 最新第四紀学」の購入申し込みを開始します！

－会員の皆さんは割引期間にお申し込みください－

日本第四紀学会は 2006 年 4 月に学会創立 50 周年を迎えましたが、その記念事業の一つとして電子出版を企画し、電子出版編集委員会のもとで編集作業を進めてまいりました。このたび編集作業は完了し、「デジタルブック最新第四紀学」として出版いたすことになりました。

第四紀は地球が誕生してからの長い歴史の中で、過去と現在、さらに現在と未来を結ぶ重要な時代です。地球温暖化やさまざまな地球環境問題が直ぐに対応すべき現実の問題となっ
ている中で、総合的な視点でこの時代の環境変動の解明をはかる第四紀学の必要性は国際的
にも国内的にも高まっています。同時にその進歩も早く、知識は日進月歩で更新されていま
す。

この出版物のねらいは、日本第四紀学会会員が中心になってきた幅広い研究活動の成果を、
最新データを含めて一般に広く普及し、特に将来を担う人々に伝えること、あわせて第四紀
学と日本第四紀学会の歩みを紹介し、この分野と学会が果たしている役割についての理解を
広めることです。多くの会員の皆さんが入手され、周囲の方々に普及されることを期待して
います。

第四紀学の範囲はきわめて広く多岐にわたるため、その成果を紹介するには膨大なページ
が必要です。また、多数のカラーの図や写真を使用するため、CD-ROM で出版する形態を
とりました。111 名の著者により執筆された第四紀学に関わるほとんどの分野の研究成果が
97 編の概説と項目（論文）として 1 枚の CD-ROM に収められ、概要を収めた冊子とセット
になっています（大項目は下記参照）。

会員割引期間は 12 月より半年間です。第四紀通信本号あるいはホームページの申込書に
より早めにお申し込みください [申込方法、申し込み先は申込書を参照下さい]。会員割引
価格は 2000 円+送料 [複数購入も可能です]。発送の開始は 1 月の予定です。

なお、会員割引期間終了後は一般販売に移行する予定です [定価は 3800 円、消費税込み
で約 4000 円の見込み]。

<大項目一覧>

- 地球史の現代：第四紀の研究
- 第四紀の地球環境とその変動
- 将来予測に向けた第四紀の研究
- ヒューマンインパクト
- 地球システムを駆動する寒冷圏の変動
- 第四紀の時を刻む層序・編年
- 日本列島の地形と地質
- 第四紀地殻変動と火山活動
- 人類のあゆみ
- 第四紀の生物群
- 第四紀研究を推進する最先端の年代測定法

日本第四紀学会 事務局 行き

FAX:03-5291-2176

『デジタルブック最新第四紀学』 申込書

(ふりがな) 会員名				ご入用部数: 冊
お届け先	〒			
電話番号			FAX番号	
領収書	要 ・ 不要		領収書宛名:	

明細書貼付欄

※料金計算方法について

【注文数が1～4冊の場合】

2,100円 × 注冊数

(メール便にて発送します)

【注文数が5冊以上の場合】

(2,000円 × 注冊数) + 740円(送料)

(宅配便にて発送します)

【ご注文方法】

1. 本の代金を下記銀行口座に入金して下さい。(恐れいりますが入金手数料は各自で御負担下さい)

入金口座 みずほ銀行 早稲田支店[普通預金口座:2093935]

2. お支払い頂いた入金明細書を注文書に添付し、事務局へFAXして下さい。

(入金明細書を添付した注文書をスキャンして、メールに添付して事務局にお送り頂くことも可能です)

3. ご指定頂いたお届け先に本をお送りします。(発送開始は2010年1月からの予定です)

【お問い合わせ】日本第四紀学会 事務局

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階

株式会社 春恒社 学会事務部内

Tel:03-5291-6231 E-mail:daiyonki(at)shunkosha.com

◆国際野外集会 "Active Tephra in Kyushu, 2010" のお知らせ

日本第四紀学会会員の皆様

日本第四紀学会の研究委員会であるテフラ・火山研究委員会は、2010年5月に国際第四紀学連合 INQUA の一組織である International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) の活動として、鹿児島県霧島市にて "International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity: Active Tephra in Kyushu, 2010" と題する国際野外集会の準備を進めています。詳細を記したセカンドサーキュラーが11月4日より公開されると同時に、登録が可能になりました。いずれも、<http://www.ris.ac.jp/intav-jp/index.html> よりご覧下さい。

下記は、本集会の開催地情報と主要なスケジュール等です。

- ・会場 : Kokubu Civic Centre, Kirishima City Hall (鹿児島県霧島市霧島市役所)
- ・日程<各種締切 (開催前) >
 - 10 February, 2010 at 24:00 (Japanese time, GMT+9:00) : Registration
 - 10 February, 2010 at 24:00 (Japanese time, GMT+9:00) : Abstract submission
- ・開催期間
 - 9 May, 2010 - 14 May, 2010: INTAV-J meeting
 - 15 May, 2010 - 17 May, 2010: Post meeting excursion
- ・参加費
 - Regular participants: JPY 40,000
 - Young scientists/Student participants: JPY 30,000
 - Spouse/accompanying person: JPY 30,000
 - (Abstract volume and field guide not included)
 - Post-conference excursion: JPY 40,000 (evening dinners not included)

※なお、Post meeting excursion への参加者 (最大 40 名) は海外からの参加者を優先させていただきます。従いまして、国内からの参加者にはかならずしもご希望に添えない場合があります。あらかじめご承知おき下さい。

◆2009年度第2回幹事会議事録

日時 : 2009年10月11日(日) 13:00-19:00

会場 : 早稲田大学文学部 16号館 10階 1029室

出席 : 遠藤、小野、百原、久保、池原、須貝、吾妻、中野(事務局)

審議内容 :

1) 報告事項として、会員動向、2009年大会(琵琶湖博物館)の開催結果と収支、「第四紀通信」次号掲載予定記事、幹事会 ML の更新、「第四紀研究」の編集、J-STAGE へのアップロード、講習会準備、連合代議員候補者の推薦、学会役員追加選挙の状況について、各担当幹事より報告された。

2) 遠藤会長より推薦された学会賞選考委員候補者、論文賞選考委員候補者について確認するとともに、名誉会員候補者選考委員の候補者の選考を行なった。

3) 「第四紀研究」に掲載予定の授賞記念論文の取扱について審議した。

4) 法務委員会の規定の一部修正案について審議した。また、5名の委員候補者を選考した。

5) ジオパーク活動に対する学会としての協力体制について検討した。

6) 2010年連合大会へ学会提案セッションにつ

いて、地球人間圏セクションに申請することとした。セッション名と内容については、小野副会長からの提案をもとに幹事会 ML で議論していくこととした。

7) 2010年5月に開催される国際シンポジウム「Active Tephra in Kyushu」に対する学会からの協力について審議した。資金補助については、主催者から収支見込資料の提出を依頼し、その内容に基づき後日判断することとした。

8) 2010年大会について、開催日時およびシンポジウムのテーマ等の検討状況を確認し、科研費申請の準備を進めることとした。

9) 2010年1月開催予定の第四紀定義問題に関する日本学術会議のシンポジウムへの共催参加を承認した。また、その講演内容および講演者に関する提案について審議した。

10) 今年度の評議員会、受賞者記念講演会、ミニシンポジウムの開催日程とその準備の進め方について議論した。

11) ポスドク研究者等に対する会費の低減措置の申し入れに対して検討を行い、引き続き議論することとした。

12) 次回幹事会を2009年12月5日(土) 午後1時に早稲田大学で開催することとした。

◆日本地球惑星科学連合 2010 年大会発表申し込み日程のお知らせ（予報）

日本地球惑星科学連合 2010 年大会が下記の日程で開催されます。連合法人化に伴い、大会プログラムが大きく変わります。第四紀学に関連するセッションが多数開催される見込みです。会員多数の参加と発表を期待します。以下は、日本地球惑星科学連合の大会ホームページ（<http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>）より編集したものです。今後、セッションの詳細情報等が掲載される予定です。

< 2010 年大会の予定概要 >

会期：2010 年 5 月 23 日（日）～ 28 日（金）（6 日間）
会場：幕張メッセ国際会議場（〒 261-0023 千葉市美浜区中瀬 2-1）
各種受付開始日・締切日

< 予稿原稿投稿 >

2010/1/12（月）より受付開始 ～早期締切 1/29（金）～最終締切 2/5（金）12:00

< 事前参加登録 >

2010/1/12（月）～ 4/9（金）12:00

< 各種料金 >

予稿集原稿投稿

早期投稿：1,500 円 / 1 件 最終投稿：3,000 円 / 1 件
図掲載（Web アップロード）：500 円 / 1 件（Max150kB）

< 参加登録（全日程料金 / 24 時間料金） >

事前登録：

一般 連合会員 11,000 円 / 5,000 円（同 大会会員 18,000 円 / 12,000 円）
小中高教員 連合会員 4,500 円 / 1,000 円（同 大会会員 11,500 円 / 8,000 円）
大学院生・研究生 連合会員 5,500 円 / 2,000 円（同 大会会員 11,500 円 / 8,000 円）

当日参加登録：

一般 連合会員 13,000 円 / 6,000 円（同 大会会員・非会員 20,000 円 / 13,000 円）
小中高教員 連合会員 6,000 円 / 3,000 円（同 大会会員・非会員 13,000 円 / 10,000 円）
大学院生・研究生 連合会員 7,000 円 / 4,000 円（同 大会会員・非会員 13,000 円 / 10,000 円）
連合個人会員でなくても大会に参加できますが、会員と大会会員・非会員とは、参加登録料が異なります。

◆ 2010 年日本地球惑星科学連合大会セッション提案について（速報）

日本第四紀学会では、『活断層と古地震』『ヒトー環境系の時系列ダイナミクス』（従来の『第四紀』に代わるセッション）を主催提案します。『変わる年代のものさしー日本における第四紀・第三紀を考えるー』『人間環境と災害リスク』『活断層と地震災害軽減』などホットな話題を含む第四紀学関連セッションが多数提案されています。ふるってご参加ください。詳細は、次号でお知らせします。提案セッション一覧が以下の連合ホームページに掲載されています。

<<https://secure.jtbcom.co.jp/jpogu/session/DisplaySessionProposalStat.asp>>

◆地球惑星科学連合代議員選挙開票、結果報告

日本地球惑星科学連合の初回代議員選挙の投票が 10 月 30 日に締め切られ、11 月 6 日に開票されました。以下の 15 名の日本第四紀学会会員が代議員に当選しました。ご協力に感謝します。< 大気海洋・環境科学：多田隆治、中塚 武 > < 地球人間圏科学：小口 高、奥村晃史、須貝俊彦、鈴木毅彦、春山成子、松本 淳、目代邦康 > < 固体地球科学：伊藤谷生 > < 地球生命科学：井龍康文、川幡穂高、北村晃寿 > < 地球惑星科学総合：小松美加、中井睦美 >

◆「地球温暖化問題を検討する研究委員会」シンポジウムー生物多様性からみた地球温暖化

日本第四紀学会「地球温暖化問題を検討する研究委員会」では、福岡での温暖化フォーラムとして、生物多様性からみた温暖化という視点を取り入れ、九州大学 GCOE「自然共生社会を拓くアジア保全生態学」との共催という形で、下記のシンポジウムを企画いたしました。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：12月19日（土） 13:00-17:00

場所：九州大学 21世紀プラザ（西新）

主催：日本第四紀学会“地球温暖化問題を検討する研究委員会”
GCOE「自然共生社会を拓くアジア保全生態学」

第1部 「生物多様性と温暖化」

趣旨説明 九州大学 矢原徹一「地球温暖化と生態系・生物多様性の変化」

講演1 東京大学 樋口広芳

「温暖化が動植物の生物季節や個体数に及ぼす影響」

講演2 九州大学 渡慶次睦範

「Coral reef ecosystems under global warming : ecological perspectives」

コメント 九州大学 小池裕子 「酸素同位体からみた貝類への温暖化の影響」

第2部 「気候変動と現代の温暖化」

趣旨説明 日本大学 遠藤邦彦 「過去から学ぶ現代の温暖化の要因」

講演1 九州大学 狩野彰宏

「鍾乳石に記録された気候変動」

講演2 九州大学 下山正一

「8000年以降の居住環境の変化 -- 東名遺跡と浜の町遺跡からみえるもの --」

コメント 福岡大学 奥野 充 「放射性炭素年代と環境変動」

総合討論

なお、シンポジウム終了後、同会場ロビーにて簡単な懇親会を予定しております。
お気軽にご参加下さい。

お問い合わせ

〒819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院比較社会文化研究院

生物多様性講座 小池裕子

TEL & FAX 092-802-5645

EMAIL: koikegsc(at)mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

◆羽鳥謙三名誉会員の御逝去を悼む

本会名誉会員の羽鳥謙三氏は、9月2日の早朝、胃癌のため亡くなられた。享年81歳であった。僅か2ヶ月半前に松井 健名誉会員が他界されたばかりであり、本会は、わが国の第四紀学研究の基礎を築いた関東ローム研究グループの中心的メンバーを、また一人失った。

1950年代末から60年代の関東ローム研究グループは、地質、地理、考古、土壌等の広い分野の大学教員、研究所所員、高校教師、学生等からなり、フィールドでは互いに「さん」付けで呼び合っていた。当時学生であった私もグループの先輩、先生方を「さん」付けで呼んでいたのも、ここでも羽鳥さんと呼ばせていただく。

羽鳥さんは、1927年現在の東京都世田谷区駒沢で出生された。世田谷中学校、仙台高等工業学校採鉱科を経て東北大学理学部地質学科を卒業、1951年に都立神代高校に着任、定年まで37年間務められた。退職後は共愛学園女子短期大学教授として赴任され、高校勤務と併せて47年間にわたり地学教育に携わった。羽鳥さんの授業は、教科書にとらわれることなく、しばしば生徒を野外に連れ出し、“体験する”地学教育を貫いていた。教育者としての羽鳥さんのお人柄は、通夜、告別式に多数の教え子の方々が弔問に訪れていたことから推察される。こうした教育実践を通して、羽鳥さんは地学教育関係の雑誌や教科書、事典等に執筆、寄稿され、地学教育の発展に貢献した。教師の立場ながら、羽鳥さんは優れた第四紀地質学の研究者、指導者であり、野外調査を基礎とする実証的研究、独創的な発想に基づく提案などの多くの業績を残し、また考古学の発掘へも参加、地形地質学的立場からの助言をされた。

羽鳥さんは、本会創設期以来の会員の一人であり、本会の運営においても大きな貢献をされた。本会創設初期の1959年以降、評議員として併せて14期(30年間に相当)を務め、このうち1969～72年度、1979～82年度の併せて4期(8年間に相当)には幹事に選出され、1979年度からの2期は幹事長を、また幹事長設置以前の1969年度からの2期は庶務幹事として、事実上の幹事長を務められた。これらの任務を通して、初期の本会の運営の安定と発展に尽力され、羽鳥さんの第四紀学に関する業績と本会運営上の功績により、2006年に名誉会員に推薦された。

羽鳥さんが関東ロームに興味を抱いた理由は、生まれ育った土地柄、幼少時にロームの穴掘りで遊んだこと、学生時代には房総丘陵をフィールドとして与えられたが、海成層の柱状図作成より面積を稼げると、河川流域の段丘やロームを調べていたことなどにあったという。このような幼少期からの体験は、発足して間もない関東ローム研究グループの中で、低位の段丘には新しいローム層から重なるという現在では常識化しているシェーマを、鉱物分析に基づいて始めて実証する成果を生んだ(1952年)。また、寿円晋吾氏との連名で地質学雑誌に公表された論文「関東盆地西縁の第四紀地史」(1958年)では、丘陵地の複雑な地形と表層堆積物の層位や分布を、地形発達史の観点から詳細に解明し、当時学生であった私達には第四紀地質学の“バイブル”的な存在であった。この論文により羽鳥さんは寿円氏と共に日本地質学会から奨励賞を授与、さらに羽鳥さんを含む関東ローム研究グループは、学界への貢献に対し1963年同会の学会賞を授与された。1965年には、これらの先駆的、独創的な研究をまとめ、「関東ローム層と段丘形成」に関する論文(英文)を京都大学に提出し、理学博士の学位を授与された。

羽鳥さんは多摩丘陵や武蔵野台地の関東ローム層、地形発達史に関する業績の他に、災害地質、応用地質に関する多くの論文、報告書を著した。羽鳥さんは自らの研



野尻湖、仲町遺跡発掘現場にて(1974年10月 斎藤 昇氏撮影) 右から 羽鳥謙三・新堀友行・湊 正雄・井尻正二・郷原保真・斎藤 豊の諸氏

究業績リストを残していなかったと思われるが、私が調べた論文・著書のうち、地盤災害、応用地質に関連するものは19編を数えた。地下水・河川など台地の水環境、斜面・低地・造成地の地盤災害に関するものが大半で、うち12編は単著であった。

羽鳥さんの絶筆となった書籍は、6月10日に刊行されたばかりの之潮（これじお）刊「地盤災害―地質学者の覚書」で、この書籍は、通夜と告別式の折に弔問客全員に渡された。羽鳥さんは私たちの研究グループ、関東第四紀研究会の会長を18年間務められており、最近の事務局の会議ではしばしば羽鳥さんの病状が報告され、案じていた。事務局長の都立東高校教諭の鶴浦武久氏と私が、入院先の都立府中病院に羽鳥さんを見舞ったのは6月7日で、本書完成の直前だったことになる。同室の患者の方もおられ、多くの会話ができる状況ではなかったが、点滴中の羽鳥さんは「あと3つは書きたいものがあるのだが、この環境では・・・」と寂しげに苦笑いをしておられたのが印象に残った。私たちは気付かなかったが、本書の刊行をどれほど心待ちしていたことだろうか。羽鳥さんは完成したこの著書を手にとり、「やっと出来上がったか」との感慨に浸りつつページを開いたに違いない。

本書の「あとがき」によれば、本書の原稿は1980年代に書かれたという。しかしその内容は、30年後の今日においても全く色褪せていない。それどころか随所に地質屋の冷静な眼が行き届き、地盤災害の実態、原因、防災対策など、生き生きと読者に語りかけている。さらに、本書の刊行が遅れた事情について、“脱稿が遅れているうちに予定していた出版社は編集者の退職により中断、所在不明となってしまった原稿、出版の断念、地盤災害の重要性を再認識、再執筆への覚悟、突然の原稿コピーの発見・・・”と、その経緯が述べられている。まるでドラマの筋書きを見るようだ。私には、消えかかるともいえる羽鳥さんの命のともし火が灯台のように周囲を照らし出し、一度は失われた原稿を力強く引き寄せ、刊行に至らせたのだ、と思われてならない。

羽鳥さん。どうぞ安らかに眠りください。

(菊地隆男)

◆日本第四紀学会役員補充選挙報告

2009年度第1回評議員会で承認された副会長・幹事補充提案をうけ、日本第四紀学会2009―2010年度役員補充選挙規定にもとづき、副会長1名、幹事1名の補充選挙を行った。2009年度選挙管理委員会は幹事会より推薦された小松原純子・近藤玲介・佐々木由香・菅沼悠介・谷口 薫・宮地良典の6名で構成され、9月27日に行われた第1回選挙管理委員会で、互選により宮地良典委員が委員長に就任した。9月28日に評議員宛に選挙会告と投票用紙を発送、10月23日投票締切とした。10月28日開催の第2回選挙管理委員会で開票が行われ、副会長に竹村恵二、幹事に渡邊眞紀子各会員が選出された。

(選挙管理委員長：宮地良典、幹事長：百原 新)

◆北淡国際活断層シンポジウム 2010 開催案内

1995年兵庫県南部地震と阪神淡路大震災15周年に際し、2000年、2005年に続き3回目の北淡国際活断層シンポジウムを開催します。今回の全体テーマは『活断層から発生する大地震の予測 -- その時間と空間』とし、最新の活断層・古地震調査研究の成果とその応用を点検して今後の研究の展開を探ります。海外研究者10数名を含む招待講演に加えて、一般研究発表も募集しております。活断層と地震災害に関する幅広い分野の方々が奮って参加されることを期待します。

会期 2010年1月17日～21日
会場 兵庫県淡路市・北淡震災記念公園セミナーハウス

主催 北淡国際活断層シンポジウム組織委員会・実行委員会
共催 淡路市・淡路市教育委員会、日本活断層学会、産業技術総合研究所活断層・地震研究センター、南カリフォルニア地震センター(予定)・IGCP 567 考古地震学 Project(予定)
後援 国際第四紀学連合古地震グループ・日本学術会議・日本第四紀学会・日本地震学会・日本地理学会・東京地学協会・日本地すべり学会 (いずれも予定)

プログラム

- 1月17日 13時～16時：普及講演会（講師：尾池和夫・伊藤和明・Robert S. Yeats）
- 1月17日 16時～17時：市民と研究者の交流集会
- 1月18日～20日 科学セッション（英語使用）-- 招待講演とポスター発表
 - Modeling of large earthquakes from paleoseismology
 - Submarine active faults and tsunamis
 - Surface effects and mass movements induced by active faulting
 - New technologies for mapping and imaging of active faults
 - Forecast of large earthquakes and strong motion: theory, observation and application
- 1月21日 巡検（E-Difense - 有馬温泉 - 六甲断層 - 蓬莱峡 - 六甲山頂：海外参加者優先）

研究発表受付 <https://apollon.nta.co.jp/hokudan10/>（12月27日締切）

登録と宿泊等予約申し込み（12月17日締切）

予約申し込みサイト：<https://apollon.nta.co.jp/hokudan10/>

科学セッション登録料 研究者：10,000円
大学院生・学生・ポスドク等：5,000円
一般：無料

公式宿舎 ウェスティンホテル淡路 2名1室 1泊朝・夕食付 一人13,800円ほか

廉価宿舎 北淡自然休暇村センター 2名1室 1泊朝・夕食付 一人6,600円ほか

懇親会：1月18日 18時開始 ウェスティンホテル淡路 会費：5,000円

昼食：1,000円の昼食を予約することができます。

詳細・最新情報は本シンポジウムウェブサイトをご覧ください。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/kojiok/hokudan2010.html>

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：荻谷愛彦 (kariya (at)isc.senshu-u.ac.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにはしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 荻谷愛彦
〒114-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 電話：044-911-1014 Fax：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階
E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-52912176